
浮気イベント

バンダナ・ピカチュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮気イベント

【Nコード】

N0309S

【作者名】

バンダナ・ピカチュン

【あらすじ】

キミキスの浮気イベントを書いた物です。

浮気イベントの見方（前書き）

これはキミキスを
持っていない人には
関係ない話です。
キミキスを持って
無い人は次の話
に進んで下さい。

浮気イベントの見方

● イベント発生条件

1. 片方
(浮気を発見する側)が
Lv2以上

2. 会話↓アタックの
後に確率で発生
この際アタックの
Lvは0でも構わない。
とにかく浮気イベントを
見たいなら、Lv0キャラに
アタックしまくれば
少なくとも一回ぐらいは
見れるかもしれません。

一回目はどのキャラとの
浮気を発見されても共通台詞。

二回目には、
前回と同じキャラだった
場合キャラに対応した
台詞に変化 (例1)
摩央姉にえりりんとの

アタックを

発見された場合。

水澤「あの子、

天才で有名な子よね？」

水澤「よかったじゃない

クールで、知的で、

光一とお似合いよ」

一回目と二回目で

浮気相手が違った場合、

『他の女の子とも仲良く

してたかチクショウ』

という感じの台詞になる

らしいです。

ちなみに、

私自身は二見さんと

浮気している所を

見られた事しか

ありません。

何故か菜々ちゃん

だけには浮気を

目撃された事が

ありません。

（ただし、菜々ちゃんは
諜報能力が高いので
裏ではバレています。
多分……） ●ブッキングイベント

同日内にそれぞれ別の
キャラとの下校デートを
セッティングした場合
ブッキングイベントが
発生。

ブッキングイベントは
浮気1回目、及び2回目
と同様の扱いを受ける。
優先される相手がどちら
になるかはランダム
要素がある模様。

浮気イベントを確定的に
起こしたい時は狙って
利用すると

いいかもしれない）

2人同時に下校を
約束しても何故か一方に
気づかれないで
待ちぼうけを

喰らわす事がある。

その場合は浮気扱いに
ならず翌朝

（用事があったんだ、
ゴメン）で片が付く。

休日デートを
ブッキングさせると
浮気扱いにはならないが
夜に電話で怒られる。
後に約束した方が
優先される模様だが、
その時に先に
約束してる方に現場を
押さえられると
前日に先に
約束した相手側の都合で
キャンセルの電話。
それが浮気2回目なら
それっきり電話も無しで
消え去る。

実際に起こりうる
浮気パターンは
1回目（浮気・下校）
（2回目（浮気・下校）
2回目
（同じ人・違う人））
の8パターン。
大きくセリフが
変化するのは
1回目の2パターンと
2回目の同じ人・違う人
の2パターンの

合わせて4パターン。

ちなみに私は下校の方は
1回も試した事は
ありません。

浮気イベントの見方（後書き）

ここからが

この小説の見所です。

星乃結美1回目（前書き）

この類いのイベントが
大好きな私は人間として
終わりかもしれませんが…

星乃結美1回目

星乃結美

「相原君……」

相原光一

「あっ！

ほ、星乃さん！」

星乃結美

「見たくなかったな…私
相原君が……他の
女の子とあんなこと…」

相原光一

「ほ、星乃さん……」

星乃結美

「離れてたから
よく見えなかったけど、

まるで恋人同士
みたいだった……」

相原光一

「う……」

星乃結美

「私……どうすればいい？
もう会わない方が
いいなら……」

相原光一

「ま、待って、
星乃さん……」

相原光一

「そ、それは……、
それは……その
星乃さんの勘違いだよ」

星乃結美

「え？」

相原光一

「見間違えたんだよ。
さっきの子とは、
その……星乃さんが
思ってるような
ことは……ないから」

星乃結美

「……本当？」

相原光一

「うん……本当だよ」

星乃結美

「……………」

星乃結美

「うん……私も
そう思いたい。
……だから、

今日のことは忘れるわ」

相原光一

「星乃さん……」

星乃結美

「けど、
もう二度と
こんなことは
しないでね」

相原光一

「うん、分かってる。
約束するよ」

星乃結美

「じゃあね…相原君…」 相原光一

（ごめん……星乃さん。

……僕は……何て
ひどいヤツなんだ……)

相原光一

(早く気持ちを
はっきりさせなきゃ。
取り返しがつかなくなる
前に……)

星乃結美1回目（後書き）

それでも私は
二見さんと実験したい。

星乃結美2回目（前書き）

この小説では、
私の体験した
浮気イベントを
書いていきます。

星乃結美2回目

星乃結美

「相原君……」

相原光一

「あっ！

ほ、星乃さん！」

星乃結美

「私……相原君のこと、
思い違いしてた」

相原光一

「え……？」

星乃結美

「あなたが……こんな
ひどい人だなんて」

相原光一

「星乃さん……」

星乃結美

「あの子、

二見さん……でしょう？

すぐく頭が良くて

有名な……」

星乃結美

「きれいな人よね……。

相原君が惹かれるのも
分かるわ」

星乃結美

「あんな子がいるなら、

私に優しくすること
ないのに……」

相原光一

「星乃さん、
ごめん……僕は……」

星乃結美

「ううん、もういいの。
相原君の困った顔、
見たくないもの」

星乃結美

「私……もう、
会わないね。
相原君とは、
いい思い出だけを
残したいから」

星乃結美

「さよならっ！」

相原光一

「あ…星乃さん…！」 相原光一

（僕は、僕は……）

取り返しのつかないこと
をしてしまった……)

相原光一

(星乃さん……ごめん……)

星乃結美2回目（後書き）

二見さんが良ければ
全て良し！

祇条深月1回目（前書き）

スキルートの
浮気イベントです。

祇条深月1回目

祇条深月

「相原さん……」

相原光一

「あっ！

し、祇条さん！」

祇条深月

「相原さん……私

……どう言えればいいのか」

祇条深月

「今の方のこと……

好きなんですか？」

相原光一

「し、祇条さん……」

祇条深月

「あんな方が
いらっしやるのに、
私、話し相手に
なって欲しいだなんて、
無理なお願いを
あなたに……」

相原光一

「い、いや、
その……それは……」

祇条深月

「私……これ以上、
あなたに甘える
わけには……」

相原光一

「ち、違うんだ、
祇条さん。
その……見間違えだよ」

祇条深月

「え……………」

相原光一

「…………さっきの子とは、
その…………祇条さんが
思ってるようなことは
…………ないから」

祇条深月

「……………」

祇条深月

「…本当…………ですか？」

相原光一

「うん…………本当だよ」

祇条深月

「……私は……あなたの
ご迷惑になって
ませんか？」

相原光一

「なつてないよ。
だから………」

祇条深月

「……はい」

祇条深月

「相原さんを信じます」

祇条深月

「あなたは、
私に嘘をつくような
人ではありませんから」

相原光一

「祇条さん……」

祇条深月

「お騒がせして
すみませんでした。

……それでは、
失礼しますね」

相原光一

「あ……祇条さん……」 相原光一

（ごめん……祇条さん。
……僕は……何て
ひどいヤツなんだ……）

相原光一

（早く気持ちを
はっきりさせなきゃ。
取り返しが
つかなくなる前に……）

祇条深月1回目（後書き）

私はこれを見ても
怒りも悲しみも
感じませんでした。

祇条深月2回目（前書き）

この話は私がキミキス

1週目に見た

浮気イベントです。

祇条深月2回目

祇条深月

「相原さん……」

相原光一

「あっ！

し、祇条さん！」

祇条深月

「好きなんです、
今の方のこと」

相原光一

「そ、それは……」

祇条深月

「以前お見かけした時、
正直に言ってくだされば
よかったのに……」

相原光一

「祇条さん……」

祇条深月

「私…嘘は嫌いです……」

相原光一

「うう……」

祇条深月

「とても知的で
きれいな方ですね。
理科室でよく
お見かけします」

祇条深月

「ひとり物思いに
ふける姿に憂いが
あって……」

祇条深月

「あなたが好きになるの……分かります」

相原光一

「祇条さん、
ごめん……僕は……」

祇条深月

「聞きたくありません！
もう嘘は言わないで
下さい！」

相原光一

「祇条さん……」

祇条深月

「私……もう、
あなたとは会えません。」

あんな素敵な方を
悲しませるわけには
いきませんから」

祇条深月

「こんな辛い思いを
するのは、
私だけで十分です
から……」

祇条深月

「さようなら」

相原光一

「あ……祇条さん……！」 相原光一

（……僕は、

僕は……取り返しの
つかないことを
してしまった……）

相原光一

(祇条さん…ごめん…)

祇条深月2回目（後書き）

祇条深月

「とても知的で
きれいな方ですね。
理科室でよく
お見かけします」

作者

「二見さんは理科室が
生息地だからね。」

祇条深月

「ひとり物思いに
ふける姿に憂いが
あって……」

作者

「それに、可愛い所も
あるし、最高だよ。」

祇条深月

「あなたが好きになるの……分かります」

作者

「この人は理解が早くて良かったよ。
許して貰えそうだ。」

相原光一

「祇条さん、
ごめん……僕は……」

祇条深月

「聞きたくありません！
もう嘘は言わないで
下さい！」

作者

「許して貰えなかったけど、」

まあ、二見さんが
居るから別にいいや。
〜

こんなふう
に思っていました。

里仲なるみ1回目（前書き）

またまたまた二見さん
攻略のついでに見た
浮気イベントです。

里仲なるみ1回目

里仲なるみ

「相原先輩……」

相原光一

「あっ！

な、なるみちゃん！」

里仲なるみ

「先輩……今、

何してたんですか……？」

相原光一

「な、何って……」

里仲なるみ

「後ろからだから、
よく見えなかったけど、
その……すごく親しそうに

してた……」

相原光一

「なるみちゃん……」

里仲なるみ

「……………」

相原

「僕は……」

里仲なるみ

「う、ううん！

ごめんなさい！

変なこと言って！

きっと見間違い

ですよネ？」

里仲なるみ

「だって、

そんな訳……
そんな訳ないもん」

相原

「なるみちゃん……」

里仲なるみ

「バカだな、私。
よく見てもいないのに
一人で騒いで、
傷ついて……」

里仲なるみ

「先輩、失礼します。
ちよっと頭を冷やして
きますね」

相原光一

「あ……なるみちゃん……」
相原光一

（ごめん……僕は……何て
ひどいやツなんだ……）

相原光一

（早く気持ちを

はつきりさせなきゃ。

取り返しがつかなくなる

前に……）

里仲なるみ1回目（後書き）

私は二見さんに
浮気を発見されたら
P S 2の電源を切って
なかった事に
しています。

里仲なるみ2回目(前書き)

作者

「うどんと僕だったら
君はどっちを取るんだ！」

里仲なるみ

「うどんです。」

作者

「……………」

里仲なるみ2回目

里仲なるみ

「相原先輩……」

相原光一

「あっ！

な、なるみちゃん！」

里仲なるみ

「この間って、
見間違いじゃ
なかったんですね」

里仲なるみ

「やだな、もう。
私の他に好きな人が
いるんじゃないですか」

里仲なるみ

「二見先輩って、
すごく賢くって
有名な人ですよね……」

里仲なるみ

「それに、きれいだし、
背だって高いし……。
私なんか……
かないっこないもん」

相原光一

「なるみちゃん……」

里仲なるみ

「でも、
だったら……何で私と……」

相原光一

「なるみちゃん、
ごめん……僕は……」

里仲なるみ

「もう何も

言わないで！」

里仲なるみ

「もう何も

聞きたくないんだもん！
先輩のことなんか、
大っ嫌いなんだもん！」

里仲なるみ

「二度と……二度と

会わないんだから！

もう私に

話しかけないで！」

里仲なるみ

「さよなら！」

相原光一

「あ……なるみちゃん……」 相原光一

（……僕は、

僕は……取り返しの
つかないことを
してしまった……)

相原

(なるみちゃん……
ごめんよ……)

里仲なるみ2回目（後書き）

なるみちゃんが
二見さんと自分を
比べている時が
一番悲しかったです。

どんなに頑張っても
その魅力は
二見さんの足元にも
及ばない事を
理解していた……

咲野明日夏1回目（前書き）

これが真の紳士だよ、
口先の魔術師、橘純一君

咲野明日夏1回目

咲野明日夏

「相原君……」

相原光一

「あっ！

さ、咲野さん！」

咲野明日夏

「今……何してたの？」

相原光一

「そ、それは……」

咲野明日夏

「離れてたからよく
見えなかったけど……
あの子と、
ずいぶん親しいんだね」

相原光一

「……………」

咲野明日夏

「…相原君にとって
私は…やっぱり友達？
いい友達で
いてくれてこと？」

相原光一

「咲野さん……………」

咲野

「ほら、
私…そういうのに
鈍いから……。
はっきり言って
もらわないと
分からなくて……………」

相原光一

「……………」

咲野明日夏

「……………安心して、
友達でいてくれて
言われるのには
慣れてるから……………」

咲野明日夏

「ちゃんと、
いい友達に……
なるから……………」

相原光一

「咲野さん……………」

相原光一

「その…見間違いだよ」

咲野

「え？」

相原光一

「さっきの子とは、
……咲野さんが
思ってるような
ことは……ないから……」

咲野明日夏

「本当？」

相原光一

「うん……本当だよ」

咲野明日夏

「相原君……」

咲野明日夏

「……そっか、ごめんね。」

大騒ぎしちゃって」

咲野明日夏

「うん！」

相原君を信じるよ！」

咲野明日夏

「…でも、

もう二度とあんなことは
見たくない。

分かってくれるよね？」

相原光一

「うん、分かってる」

咲野明日夏

「じゃあね、相原君。

またね」相原光一

（ごめん…咲野さん。

…僕は…何て

ひどいやツなんだ…）

相原

（早く気持ちを
はつきりさせなきゃ。
取り返しがつかなくなる
前に……）

咲野明日夏1回目（後書き）

アマガミの涙イベントは
変態紳士が笑いを
とろうとしているように
しか見えないと思うのは
私だけでしょうか？

咲野明日夏2回目（前書き）

これは罪悪感を
感じました……

咲野明日夏2回目

咲野明日夏

「相原君……」

相原光一

「あっ！

さ、咲野さん！」

咲野明日夏

「信じるんじゃ
なかったな、

相原君のこと……」

相原光一

「え……」

咲野明日夏

「ひどい人だね、
相原君って。」

私が恋に
疎いからって……
だますなんて」

相原光一

「咲野さん……」

咲野明日夏

「他に好きな人が
いるなら、
いるって正直に
言えばいいじゃない！」

咲野明日夏

「さっきの子、
二見さんでしょ？
すぐく頭がよくて
有名な子だよね」

咲野明日夏

「……やっぱり、
相原君は頭のいい子が

好みなんだ」

咲野明日夏

「私なんかじゃ、
最初から勝負に
ならないよ……」

相原光一

「咲野さん、
ごめん……僕は……」

咲野明日夏

「言い訳なんか
しないで！」

咲野明日夏

「いくら私でも……
もうだまされ
ないんだから」

相原光一

「咲野さん……」

咲野明日夏

「私、相原君とは、
もういい友達で
いられない……」

咲野明日夏

「二度と
話しかけないで！」

咲野明日夏

「さよならっ！」

相原光一

「あ……咲野さん……！」 相原光一

（……僕は、

僕は……取り返しの
つかないことを
してしまった……）

相原光一

(咲野さん……ごめん……)

咲野明日夏2回目（後書き）

まあ、

咲野さんか二見さんか
って言ったら無条件で
二見さんですね。

水澤摩央1回目（前書き）

この人の体型以外は
好きでは無いです。

水澤摩央1回目

水澤摩央

「光一……」

相原光一

「あっ！

ま、摩央姉ちゃん！」

水澤摩央

「見たわよ……今の……」

水澤摩央

「ずいぶん親しそうに
してたじゃない。
誰なのよ、あの子」

相原

「だ、誰って……」

水澤

「…答えられないの？」

相原

「……………」

水澤摩央

「まあ、いいわ。

私と付き合ってる

訳じゃないし、

これ以上、

とやかく言うのもね…」

水澤

「でも、覚えておいて。

こんなことを

続けてたら、私も、

あの子も傷つくのよ。

分かるわよね？」

相原光一

「う、うん……」

水澤摩央

「……分かってくれれば
いいわ。

今日のことはもう
忘れるから」

水澤摩央

「光一は
そんな人じゃないし、
今日のは、
何か魔が差したんだと
思う。」

水澤摩央

「じゃあね、光一。
優柔不断も罪よ。」

相原光一

「あ……摩央姉ちゃん……」 相原光一

（ごめん…僕は…なんて
ひどいやツなんだ…）

相原光一

（早く気持ちを
はっきりさせなきゃ。
取り返しが
つかなくなる前に…）

水澤摩央1回目（後書き）

傷つくのは水澤摩央、
あんただけだよ。

水澤摩央2回目（前書き）

私はこのイベントを見て
大笑いしました。

水澤摩央2回目

水澤摩央

「光一……」

相原光一

「あっ！

ま、摩央姉ちゃん！」

水澤摩央

「ひどい！

ひどすぎる！

まだ、あの子と

仲良くしてたのね！」

水澤摩央

「あの子、

天才で有名な子よね？」

水澤摩央

「よかったじゃない。
クールで、知的で、
光一とお似合いよ」

水澤摩央

「でも、
それならそうと、
早く言いなさいよね！
私もあの子も
傷つくでしょ！」

相原光一

「摩央姉ちゃん……」

水澤摩央

「あなたなんか
大っ嫌いよ！
もう二度と
話しかけないで！」

水澤摩央

「さよなら！」

相原光一

「…………あ

…………摩央姉ちゃん…………」 相原光一

（…………僕は、

僕は…………取り返しの
つかないことを
してしまった…………）

相原光一

（ごめん…………

摩央姉ちゃん…………）

水澤摩央2回目（後書き）

こうして、
摩央チェックにより
二見さんと釣り合う
男になった相原光一は
二見さんと結婚して
外国で暮らす事にな
りました。

二見瑛理子

「光一、この妹さんと
一緒に写っている
くせっ毛の女の人？」

相原光一

「いや、知らないな。」

★
B
E
S
T

E
N
D
★

二見瑛理子1回目（前書き）

二見さん好きな私には
精神的ダメージ大でした

二見瑛理子1回目

二見瑛理子

「クスッ、やるわね、
相原」

相原光一

「あっ！

ふ、二見さん！」

二見瑛理子

「あなたも実験？」

相原光一

「い、いや、
そうじゃないよ」

二見瑛理子

「私も他の男の子と
実験しようかな」

相原光一

「……………」

二見瑛理子

「いい？」

相原光一

「……それは

……やめてほしい……」

二見瑛理子

「身勝手ね……」

相原光一

「うん……」

相原光一

「ごめん……二見さん……
なんて言えばいいのか
分からないよ……」

二見瑛理子

「……今回だけよ」

二見瑛理子

「次に見つけたら、
もう相原は
友達ですらないわ」

相原光一

「うん、分かった」

二見瑛理子

「じゃあね」

二見瑛理子1回目（後書き）

他のヒロインと違い、

光一のした事を

気のせいと言わないで

光一がした事の重大さを

鋭く指摘する。

確かに二見さんが

他の男と実験していたら

私は自殺しますね。

そして、次見たら

終わりにすると

しっかり光一と

約束しました。

二見さんが感じている

感情は怒りか悲しみか

失望か……

私には分かりませんが

私は罪悪感を

とても強く感じました。

この日を境に

夢の中に二見さんが

出てくるように

なりました。

今でも時々出て来て
アマガミのヒロインと
楽しくやっていると
二見さんが無表情で
こっちを見ってきます。

と言う訳で、

私は二見さんの
浮気イベントは
ここまでしか
見ていません。

二見瑛理子2回目（前書き）

私自身はこのイベントを
見た事はありません。

二見瑛理子2回目

二見瑛理子

「クスッ、

あの子とまだ実験
続けてたのね」

相原光一

「あっ！

ふ、二見さん！」

二見瑛理子

「そんなに
あの子がいいの？」

相原光一

「……………」

二見瑛理子

「無理ないわね……」

健康そうな子だもの」

二見瑛理子

「じゃあね、
もう会わないわ」

相原光一

「あ…待って、
二見さん」

二見瑛理子

「さよなら。
実験は終わりよ」

相原光一

「あ……二見さん…！」 相原光一

(……僕は、
僕は……取り返しの
つかないことを
してしまった……)

相原光一

(二見さん……ごめん……)

二見瑛理子2回目（後書き）

二見さんとの実験が
終わってしまった……

作者の好きなヒロイン

好きな順で
紹介しています。

●好き

・二見瑛理子

全てのギャルゲーの
頂点に立つ者だと
私は思います。

・咲野明日夏

スポーツ少女なのに
女の子らしい所が
大好きです。

・スキ星乃結美

いい子すぎる。

・ナカヨシ祇条深月

ご主人様は反則。

・里仲なるみ

後輩キャラは最高です。

●苦手なヒロイン

・ナカヨシ星乃結美

星乃さんはそのままの
方が可愛い。

・相原菜々

妹キャラは美也が一番。

・^{スキ}祇条深月

3、4回ぐらいしか
ご主人様って
呼んでくれない……

・水澤摩央

全体的にキミキスキャラ
の方が好きですが、
先輩キャラはやっぱり
モリモリに限る。

●嫌いな人

・栗生恵

誰だっけ（笑）

下校イベント（不完全）（前書き）

●目次

・ 1 ページ目

星乃さん 1 回目

・ 2 ページ目

星乃さん 2 回目 A

・ 3 ページ目

星乃さん 2 回目 B

・ 4 ページ目

祇条さん 1 回目

・ 5 ページ目

祇条さん 2 回目 A

・ 6 ページ目

祇条さん 2 回目 B

・ 7 ページ目

祇条さん 2 回目
(ナカヨシバージョン)

・ 8 ページ目

なるみちゃん 1 回目

・ 9 ページ目

明日夏 1 回目

・ 10 ページ目

二見さん 1 回目

・ 11 ページ目

下校イベント（不完全）

星乃結美

「相原君…おはよう…」

相原光一

「あっ！

ほ、星乃さん！」

星乃結美

「私と一緒に帰るって
約束してたのに……
他の子と帰るなんて…」

星乃結美

「どうして？」

相原光一

「・・・その、
星乃さんとの約束……
忘れてたんだ……」

星乃結美

「忘れてた・・・？
そんなのひどい・・・」

星乃結美

「私・・・相原君と
一緒に帰れるの、
楽しみにしてたのに・・・」

相原光一

「ごめん・・・
本当にごめん・・・」

相原光一

「星乃さん。
あんなことは
もう二度としないよ。
だから、
今回だけ許して」

星乃結美

「……………」

星乃結美

「本当にもうしない？」

相原光一

「しないよ。誓うよ」

星乃結美

「うん、分かった」

星乃結美

「……………もういいわ。
私……………忘れるから」

相原光一

「星乃さん、
ありがとう」

星乃結美

「うん。私、

先に教室へ行くわね」

相原光一

（こうして星乃さんに
許してもらった。）

相原光一

（2人と一緒に帰る約束をするなんて、僕はバカだ……。）星乃
結美

「相原君……」

相原光一

「あっ！

ほ、星乃さん！」

星乃結美

「もう、
約束を忘れてたなんて、
言わないわよね？」

星乃結美

「あの子、
二見さん……でしょう？
すぐく頭が良くて
有名な……」

星乃結美

「きれいな人よね……。
相原君が惹かれるのも
分かるわ」

星乃結美

「あんな子がいるなら、
私に優しくする
ことないのに……」

相原光一

「星乃さん、

ごめん……僕は……」

星乃結美

「ううん、もういいの。
相原君の困った顔、
見たくないもの」

星乃結美

「私……もう、
会わないね。」

相原君とは、
いい思い出だけを
残したいから」

星乃結美

「さよならっ！」

相原光一

「あ……星乃さん……！」

相原光一

（僕は、

僕は……取り返しの
つかないことを
してしまった……）

相原光一

（星乃さん……ごめん……） 星乃結美

「相原君……」

相原光一

「あっ！

ほ、星乃さん！」

星乃結美

「私……相原君のこと、
思い違いしてた」

相原光一

「え……？」

星乃結美

「あなたが……こんな
ひどい人だなんて」

星乃結美

「この間の子の他にも…
親しい子が
いたなんて……」

相原光一

「星乃さん…それは…」

星乃結美

「ううん、もういいの。
言い訳なんて……
聞きたくない……」

星乃結美

「相原君とは……
いい思い出だけを

残したいから……」

相原光一

「星乃さん……」

星乃結美

「私……もう、
会わないね。」

会っても……どんな顔して
いいか分からないもの」

星乃結美

「さよならっ！」

相原光一

「あ！ 星乃さん！」

相原光一

（僕は……僕は……
ダメなヤツだ。」

一人に決められず、
優柔不断に
ずるずるとここまで…

相原光一

（星乃さん…ごめん…）

相原光一

（僕は…僕は…） 祇条深月

「相原さん…

おはようございます…」

相原光一

「あっ！

し、祇条さん！」

祇条深月

「私と約束しましたよね？
一緒に帰るって…」

相原光一

「うん……」

祇条深月

「それなのに……
他の方と一緒に
帰るなんて……」

相原光一

「ごめん、祇条さん……」

祇条深月

「一体……どうして
なんですか？」

相原

「い、いや、
その……そうじゃ
なくて……」

相原光一

「祇条さんとの約束……
忘れてたんだ……」

祇条深月

「忘れてた？
そんなの…ひどい…」

相原光一

「ごめん……
本当にごめん……」

相原光一

「祇条さん、
あんなことは
もう二度としないよ。
だから、
今回だけ許して……」

祇条深月

「……………」

祇条深月

「分かりました」

相原光一

「許してくれるの？」

祇条深月

「はい……」

祇条深月

「でも、

あの方が好きなら、

正直にそう

おっしゃってください」

祇条深月

「あんな方が

いらっしゃるのに、

話し相手になって

欲しいだなんて……」

祇条深月

「私、無理な
お願いをあなたに
しているのでは……」

相原光一

「そうじゃない！
そうじゃないよ……」

祇条深月

「……………」

祇条深月

「分かりました。
あなたを信じます」

祇条深月

「相原さんは、
私に嘘をつくような
人ではありませんから」

相原光一

「……………」

祇条深月

「では、失礼します」

相原光一

（こうして祇条さんに
許してもらった。）

相原光一

（2人と一緒に帰る
約束をするなんて、
僕はバカだ……。）
祇条深月

「相原さん……
おはようございます…」

相原

「あっ！
し、祇条さん！」

(1回目が浮気の場合)

祇条深月

「好きなんです、
一緒に帰られた
方のこと……」

相原光一

「え……」

祇条深月

「以前お見かけした時、
正直に言っただされば
よかったのに……」

相原光一

「祇条さん……」

祇条

「あの方、
1年生の階で
よくお見かけします」

祇条深月

「とてもかわいらしくて、
いつも無邪気に
駆けてらっしゃって…」

祇条深月

「相原さんが
好きになるの……
分かります」

（1回目が下校の場合）

祇条深月

「約束を忘れてただなんて
嘘だったんですね？」

相原光一

「え……」

祇条深月

「好きなんですネ、
一緒に帰られた
方のこと……」

相原光一

「そ、それは……」

祇条深月

「あの方、
1年生の階で
よくお見かけします」

祇条深月

「とてもかわいらしくて、
いつも無邪気に駆けて
らっしゃって……」

祇条深月

「あなたが好きに
なるの……分かります」

相原光一

「祇条さん、
ごめん……僕は……」

祇条深月

「もういいんです。
何も言わないで
ください」

祇条深月

「嘘は……嫌いです」

祇条深月

「私、もうあなたとは
会いません。」

祇条

「こんな辛い思いはもう
たくさんですから」

相原

「祇条さん……」

祇条深月

「さようなら」

相原光一

「あ……祇条さん……!」

相原光一

（僕は、

僕は……取り返しの
つかないことを
してしまった……」

相原

（祇条さん……ごめん……） 祇条深月

「相原さん……」

おはようございます……」

相原光一

「あっ！

し、祇条さん！」

祇条深月

「私……相原さんが
分からなくなり
ました……」

祇条深月

「一緒に帰られた方、
この間とは

違う方でしたね」

相原光一

「し、祇条さん……
それは……」

祇条深月

「悲しいです……。

相原さんが
そんな人だった
なんて……」

祇条深月

「女の子なら誰でもいい、
不誠実な人だった
なんて……」

相原光一

「祇条さん……」

祇条深月

「私、もう

あなたとは会いません。
こんな辛い思いは
もうたくさんですから」

祇条深月

「さようならっ！」

相原光一

「あ！祇条さん！」

相原光一

（僕は……僕は……
ダメなヤツだ。

一人に決められず、
優柔不断に
ずるずるとここまで…）

相原光一

（祇条さん……
ごめん……）

相原光一

（僕は……僕は……） 祇条深月

「ご主人様……」

おはようございます……」

相原光一

「あっ！

し、祇条さん！」

（1回目が浮気）

祇条深月

「好きなんですネ、
一緒に帰られた
方のこと……」

相原光一

「え……」

祇条深月

「以前お見かけした時、
正直に言ってくだされば
よかったのに……」

相原光一

「祇条さん……」

祇条深月

「あの方、
サッカー部で
活躍されてる
方ですよね？」

祇条深月

「男子を相手に
ボールを追う姿は、
私が見ても
胸がすく思いです」

祇条深月

「ご主人様が
好きになるの……
分かります」

相原光一

「祇条さん、
ごめん……僕は……」

祇条深月

「もういいんです。
何も言わないで
ください」

祇条深月

「嘘は…嫌いです」

祇条深月

「私……もう、

あなたとは会えません。
お父様にお話して、
この話は取りやめて
もらいます」

祇条深月

「あんな素敵な方を、
悲しませるわけには
いきませんから」

祇条深月

「こんな辛い思いを
するのは、
私だけで
十分ですから……」

相原光一

「祇条さん……」

祇条深月

「さようなら」

相原光一

「あ……祇条さん……！」

相原

（……僕は、

僕は……取り返しの
つかないことを
してしまった……）

相原光一

（祇条さん……ごめん……）里仲なるみ

「相原先輩……」

相原光一

「あっ！

な、なるみちゃん！」

里仲なるみ

「私と帰る

約束してたのに、
他の方と帰るなんて…」

相原光一

「ごめん、
なるみちゃん……」

相原光一

「その……なるみちゃん
との約束……
忘れてたんだ……」

里仲なるみ

「そんなの……
ひどいです……」

相原光一

「うん……
言い訳できないよ」

里仲なるみ

「私……一人で帰って、
とっても寂しかった…」

相原光一

「ごめん……
本当にごめん………」

相原光一

「なるみちゃん、
あんなことは
もう二度としないよ。
だから、
今回だけ許して………」

里仲なるみ

「……………」

里仲なるみ

「本当ですか？」

相原光一

「本当だよ！
誓うよ！」

里仲なるみ

「……じゃあ、
許してあげます。
私だって約束
忘れちゃうこと
あるもん」

相原光一

「なるみちゃん、
ありがとう」

里仲なるみ

「失礼します・・・」

相原光一

（こうしてなるみちゃん
に許してもらった。）

相原光一

（2人と一緒に帰る約束をするなんて、僕はバカだ……。）
咲野明日夏

「おはよ、相原君……」

相原光一

「あっ！

さ、咲野さん！」

咲野明日夏

「……私と一緒に帰って約束してたのに、他の子と帰るなんて、信じられないよ」

相原光一

「ごめん、咲野さん……」

咲野明日夏

「いったい
どう言うつもり？」

相原

「ごめん。

その……咲野さんとの
約束…忘れてたんだ…」

咲野明日夏

「え？

忘れてた？」

相原光一

「そう……

忘れてたんだ……」

咲野明日夏

「あ……」

咲野明日夏

「そ、そっか……」

忘れてたんだ。

何だ、

それじゃ仕方ないね」

咲野明日夏

「忘れちゃう

ことってあるもんね……」

相原光一

「……ごめん、咲野さん

あんなことは

もう二度としないよ。

だから、

今回だけは許して」

咲野明日夏

「相原君……」

咲野明日夏

「そんなに謝らないで。

悪気はなかったんでしょ？
もう気にしてないから」

咲野明日夏

「さ、行こつ、

相原君。

朝からごめんね、
こんな話して」

相原光一

「咲野さん……」

相原光一

（こうして咲野さんに
許してもらった。）

相原光一

（2人と一緒に帰る
約束をするなんて、
僕はバカだ……。）

二見瑛理子

「おはよう、相原」

相原光一

「あっ！

ふ、二見さん！」

二見瑛理子

「クスッ、私を置いて、
他の子と帰るなんて
やるわね」

相原光一

「うう……」

二見瑛理子

「私がどんな顔をするか
見てみたかったの？」

相原光一

「そ、そうじゃないよ」

二見瑛理子

「じゃあ、何？」

相原光一

「……そ、その、

二見さんとの約束……
忘れてたんだ……」

二見瑛理子

「忘れてた？

下手な言い訳ね」

相原光一

「ほ、本当だよ。

本当に……忘れてたんだ」

二見瑛理子

「……………」

相原光一

「二見さん、
もう二度と忘れないよ。
だから、
今回だけ許して……」

二見瑛理子

「……………」

二見瑛理子

「……許すも、
許さないも、
別にいいわよ」

二見瑛理子

「……私だって
忘れることはあるわ」

相原光一

「二見さん……」

二見瑛理子

「じゃあね、相原」

相原光一

（こうして二見さんに
許してもらった。）

相原光一

（2人と一緒に帰る
約束をするなんて、
僕はバカだ・・・。） 二見瑛理子

「おはよう、相原」

相原光一

「あっ！

ふ、二見さん！」

二見瑛理子

「クスッ、

手の込んだ実験ね。
今度は一緒に
帰るところを
私に見せつけるなんて」

二見瑛理子

「どう？

いい気分だった？」

相原光一

「二見さん…」

二見瑛理子

「…でも、

無理ないわね。

かわいらしい子
だったもの」

相原光一

「二見さん、ごめん。
僕は……」

二見瑛理子

「私とあなたの
実験も終わりね」

二見瑛理子

「さよなら」

相原光一

「あ……二見さん……！」

相原光一

（……僕は、

僕は……取り返しの
つかないことを
してしまった……）

相原光一

（二見さん……ごめん……） 栗生恵

「おはよう！」

相原君！」

相原

「あっ！

く、栗生さん！」

栗生恵

「この間、

見間違えじゃ
なかったのね」

栗生恵

「あんな……

不純異性交遊みたいな
ことをしたあげくに、
今度は私を置いてきぼり
にするなんて……」

栗生恵

「いったい

どういうつもりよ！」

相原光一

「く、栗生さん、
それは……」

栗生恵

「見せつけた
かったの!?
1年の里仲さんの
こと!」

栗生恵

「無邪気で、明るくて、
元気いっぱい……、
私とは大違いよ!」

相原光一

「栗生さん、
そんなつもりじゃ……」

栗生恵

「じゃあ、
どんなつもりよ！
いい加減なこと
言わないで！」

相原光一

「……………」

相原光一

「栗生さん、ごめん。
僕は……」

栗生恵

「あゝあ…私、
バカだなあ。
相原君は、
少し私に気があるのかと
思ってた」

栗生恵

「でも、
私の思い過ごし

だったみたい」

相原光一

「栗生さん……」

栗生恵

「じゃあね、相原君。
健全な交際を
心がけてね」

栗生恵

「さよなら」

相原光一

「あ…栗生さん…！」

相原光一

（……僕は、
僕は……取り返しの
つかないことを

してしまった……)

相原光一

(栗生さん……ごめん……)

相原光一

(僕は……僕は……)

下校イベント（不完全）（後書き）

これは私自身が見た
イベントでは無いので
間違いがあつたかも
しれません。

おまけ

祇条深月

「ご主人様……」

相原光一

「あっ！

し、祇条さん！」

祇条深月

「好きなんです、
今の方のこと……」

相原光一

「そ、それは……」

祇条深月

「以前お見かけした時、
正直に言ってくだされば
よかったのに……」

相原光一

「祇条さん……」

祇条深月

「私……嘘は嫌いです……」

相原光一

「うう……」

祇条深月

「とてもきれいで
健康的な方ですね」

祇条深月

「男子を相手に、
サッカー部で
活躍されてる姿は、
私が見ても
胸がすく思いです」

祇条深月

「ご主人様が
好きになるの……
分かります」

相原光一

「祇条さん、ごめん……
僕は……」

祇条深月

「聞きたくありません！
もう嘘は言わないで
下さい！」

相原光一

「祇条さん……」

祇条深月

「私……もう、

あなたとは会えません。
お父様にお話して、
この話は取りやめて
もらいます」

祇条深月

「あんな素敵な方を、
悲しませるわけには
いきませんから」

祇条深月

「こんな辛い思いを
するのは、
私だけで
十分ですから……」

祇条

「さようなら」

相原光一

「あ…祇条さん…！」

相原光一

(……僕は、

僕は……取り返しの
つかないことを
してしまった……)

相原光一

(祇条さん……ごめん……)

相原光一

(でも、

この話って、一体……) 栗生恵

「今の人、誰!?

校内であんな

不純異性交遊みたいな
こととして!」

相原光一

「い、いや……

そう言う訳じゃ……」

栗生恵

「じゃあ…何!？」

相原光一

「その……」

栗生恵

「答えられないの!？」

相原光一

「うう……」

栗生恵

「……………」

栗生恵

「私…あなたのこと、
見直し始めてたのに…」

相原光一

「え……?」

栗生恵

「もしかしたら……
軟弱じゃなくて、
優しい気持ちの
男の子なのかなって
思い始めてたのに……」

栗生恵

「それなのに……
校内であんなこと
するなんて……」

相原光一

「栗生さん……」

栗生恵

「相原君……、
今の人のこと、
好きなの？」

相原光一

「それは……」

栗生恵

「好きなら好きと、
男らしく言って！」

相原光一

「……………」

相原光一

「……栗生さん。
それは勘違いだよ」

栗生恵

「え？」

相原光一

「見間違えたんだよ。
さっきの子とは、
その……栗生さんが
思ってるような
ことは……ないから」

栗生恵

「本当？」

相原光一

「うん、本当だよ」

栗生恵

「…そう。
ちょっとほっとしたわ。
相原君があんなことする
わけないものね」

栗生恵

「離れてたから、
私が見間違えたのね…」

相原光一

「……………」

栗生恵

「でも、
もう二度と誤解を
招くようなことは
やめてね。
次に見かけたら、
私………」

相原光一

「うん、分かってるよ」

栗生恵

「じゃあね、相原君」

相原光一

（ごめん……栗生さん。
……僕は……何て
ひどいヤツなんだ……）

相原光一

（早く気持ちを
はっきりさせなきゃ。
取り返しがつかなくなる
前に……）栗生恵

「見たわよ！相原君」

相原光一

「あっ！

く、栗生さん！」

栗生恵

「あれほど、
不純異性交遊みたいな
ことはやめてって
言ったのに、
あなたって人は……」

相原光一

「ご、ごめん……」

僕は……」

栗生恵

「言い訳なんか

聞きたくないわ！

今の子、

この間の子と

違う子じゃない！」

相原光一

「……………」

栗生恵

「あなたって、

本当にひどい人ね。

女の子なら

誰でもいいの？」

栗生恵

「見損なっただわ！」

栗生恵

「さよなら！」

もう二度と私に
近寄らないで！」

相原光一

「あ！ 栗生さん！」

相原光一

（僕は……僕は……

ダメなヤツだ。

一人に決められず、

優柔不断に

ずるずるとここまで……）

相原光一

（栗生さん……ごめん……）

優柔不断は罪なのか？（前書き）

優柔不断な恋愛の
末路です。

優柔不断は罪なのか？

星乃結美

「相原君……」

相原光一

「あっ！

ほ、星乃さん！」

星乃結美

「私……相原君のこと、
思い違いしてた」

相原光一

「え……？」

星乃結美

「あなたが……こんな
ひどい人だなんて」

星乃結美

「この間の子の
他にも……、
親しい子が
いたなんて……」

相原光一

「星乃さん……それは……」

星乃結美

「ううん、もういいの。
言い訳なんて……
聞きたくない……」

星乃結美

「相原君とは……
いい思い出だけを
残したいから……」

相原光一

「星乃さん……」

星乃結美

「私……もう、
会わないね。」

会っても……どんな顔
していいか
分からないもの」

星乃結美

「さよならっ！」

相原光一

「あ！ 星乃さん！」

相原光一

（僕は……僕は……
ダメなヤツだ。

一人に決められず、
優柔不断に
ずるずるとここまで……）

相原光一

(星乃さん…ごめん…)

相原光一

(僕は…僕は…) 祇条深月

「相原さん…」

相原光一

「あっ！」

し、祇条さん！」

祇条深月

「私…相原さんが
分からなくなり
ました…」

祇条深月

「違う方だなんて…。
この間と違う方

だなんて……」

相原光一

「し、祇条さん……
それは……」

祇条深月

「悲しいです……。

相原さんが
そんな人だった
なんて……」

祇条深月

「女の子なら誰でもいい、
不誠実な人だった
なんて……」

相原光一

「祇条さん……」

祇条深月

「私、もうあなたとは
会いません。

こんな辛い思いは
もうたくさんですから」

祇条深月

「さようならっ！」

相原光一

「あ！祇条さん！」

相原光一

（僕は……僕は……
ダメなヤツだ。

一人に決められず、
優柔不断に
ずるずるとここまで……）

相原光一

（祇条さん……ごめん……）

相原光一

(僕は……僕は……) 里仲なるみ

「相原先輩……」

相原光一

「あっ！

な、なるみちゃん！」

里仲なるみ

「この間って、
見間違いじゃ
なかったんですね」

里仲なるみ

「ひどいなあ、先輩。
もう何も
信じられないです」

里仲なるみ

「だって、この間と
違う子なんだもん」

里仲なるみ

「私みたいな子が一体
何人いるんですか？」

相原光一

「なるみちゃん……
それは……」

里仲なるみ

「何も言わないで！」

里仲なるみ

「先輩なんか……
先輩なんか、
大っ嫌いなんだから！」

里仲なるみ

「さよなら！」

相原光一

「あ！」

なるみちゃん！」

相原光一

（僕は……僕は……

ダメなヤツだ。

一人に決められず、

優柔不断に

ずるずるとここまで……）

相原光一

（なるみちゃん……

ごめんよ……）

相原光一

（僕は……僕は……） 咲野明日夏

「相原君……」

相原光一

「あっ！

さ、咲野さん！」

咲野明日夏

「信じるんじゃ
なかったな、

相原君のこと……」

相原光一

「え……」

咲野明日夏

「ひどい人だね、
相原君って。

私が恋に疎い
からって…こんな…」

相原光一

「咲野さん……」

咲野明日夏

「この間の子と
違う子だなんて……。
何人もの女の子と
あんなことしてる
なんて……
信じられない！」

相原光一

「咲野さん…僕は…」

咲野明日夏

「もういい！
言い訳なんて
聞きたくない！」

咲野明日夏

「いくら私でも……
もうだまされ
ないんだから！」

相原光一

「咲野さん……」

咲野明日夏

「私、相原君とは、
もういい友達で
なんていられない……」

咲野明日夏

「二度と話し
かけないで！」

咲野明日夏

「さよならっ！」

相原光一

「あ！」

咲野さん！」

相原光一

（僕は……僕は……

ダメなヤツだ。

一人に決められず、

優柔不断に

ずるずるとここまで……）

相原光一

（咲野さん……ごめん……）

相原光一

（僕は……僕は……） 水澤摩央

「光一……」

相原光一

「あっ！

ま、摩央姉ちゃん！」

水澤摩央

「懲りない人ね。
今度は違う子？」

相原光一

「うう……」

水澤摩央

「一体何人の女の子を
傷つければ
気が済むのよ！」

相原光一

「摩央姉ちゃん、
そんなつもりじゃ……」

水澤摩央

「じゃあ、
何のつもりよ！
言ってみなさいよ！」

相原光一

「……………」

水澤摩央

「さよなら、光一。
もう顔も見たくない」

水澤摩央

「もう二度と
話しかけないで！」

相原光一

「あ！」

摩央姉ちゃん！」

相原光一

（僕は……僕は……

ダメなヤツだ。

一人に決められず、

優柔不断に

ずるずるとここまで……）

相原光一

（摩央姉ちゃん……

ごめんよ……)

相原光一

(僕は……僕は……) 二見瑛理子

「クスッ、

やるわね、相原」

相原光一

「あっ！

ふ、二見さん！」

二見瑛理子

「クスッ、

もう忘れてたなんて、

下手な言い訳は

通用しないわよ」

二見瑛理子

「今度はまさか

実験を……しかも、

この間とは違う子で

見せつけるなんて
思いも寄らなかったわ」

相原光一

「そ、そんな
つもりじゃ……」

二見瑛理子

「馬鹿な男……」

相原光一

「……………」

二見瑛理子

「悪かったわね、
私に付き合わせて。
もう好きにすれば
いいわ」

二見瑛理子

「私との実験は終わり」

二見瑛理子

「さよなら」

相原光一

「あ、二見さん！」

相原光一

（僕は……僕は……

ダメなヤツだ。

一人に決められず、

優柔不断に

ずるずるとここまで…）

相原光一

（二見さん……ごめん…）

相原光一

（僕は……僕は……）

★B A D E N D★作者が勝手に想像した
ヒロイン達の将来

・星乃結美

転校した先の男子生徒と
純愛をして結婚。

・祇条深月

結婚相手と平和に暮らす

・里仲なるみ

うどん屋にバイトしに
来た人に一目惚れして
恋人同士になる。

・咲野明日夏

外国の人と付き合う。

・水澤摩央

サックスを吹く人と
付き合う。

・二見瑛理子

外国の大学で1人
黙々と勉強をする。

優柔不断は罪なのか？（後書き）

●結果

二見さん以外は
主人公が居なくても
幸せになれる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0309s/>

浮気イベント

2011年4月4日10時47分発行